

O1-001

障害児・者通所施設の職員がとらえた看護学生
のボランティア交流活動の現状・ニーズ・課題

増田 由美、別所 史子

四日市看護医療大学

【背景と目的】

障害をもち医療に依存する子どもの在宅移行は近年増加傾向にあり、地域での療養生活への支援が課題となっている。A 看護大学学生ボランティアサークルは、重症心身障害児・者の地域生活を支える生活介護施設での交流活動を有志で行っており、世代の近い学生と施設利用者のふれあいは障害児・者の地域社会との交流促進を図ると共に、看護学生の障害への理解、看護観育成にも貢献すると考えられる。しかし、2019 年からのコロナ禍では、これまでの交流のありようを大きく変換することを余儀なくされ、両者の関係性の維持と活動の質の低下を防ぐために、交流活動を振り返ることが必要と考えた。そこで、施設利用者と密接にかかわり共に交流活動への参加が得られる施設職員から見た看護学生との交流活動の現状・ニーズ・課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2021 年 11 月～12 月に、A 看護大学障害児・者ボランティアサークルが交流活動を行う 2 つの重症心身障害者生活介護施設の 10 名の職員を対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、結果を質的帰納的に分析した。なお、本研究は A 大学の倫理委員会の承認を得た。

【結果】

2 施設から得た結果から 5 つのカテゴリー、10 のサブカテゴリーが生成された。施設職員は、障害はさまざまでも利用者・学生・職員が《参加者全員にとり楽しく刺激がある》方法や内容を期待し、施設利用目的でもある入浴や健康管理に影響せず負担とならない《利用者の日課やケアに沿える》ことを重視していた。また、感染や事故のない安全性の確保とコロナ禍で対面交流が叶わない場合のオンライン利用、学生と利用者双方向からの企画など《交流の質を豊かにする》ことをめざし、《利用者の社会参加につながる》機会を保ちながら、将来看護職となる学生にとり《看護学生として意義ある活動》につなぐべきととらえていた。

【考察】

生活介護サービスを主とする施設では日常生活（日課）の維持が基盤となるため、その上で限りある機会や時間の有効活用について施設側と学生双方で交流の質を追及する姿勢をもつことが求められた。そして、どのような障害特性をもっている人として平等に楽しめる権利を尊重した交流であり、障害理解だけでなく倫理面でも看護職をめざす学生の資質向上を期待していた。

本研究は、勇美記念財団「在宅医療研究への助成」による研究の一部である。

O1-002

在宅生活を送る脊髄性筋萎縮症 I 型患者 2 名
が自己形成期を振り返り語った思い
—計量的テキスト分析を通して三原 俊¹、前林 英貴²、高田 哲³¹神戸大学大学院保健学研究科、²島根県立大学保育教育学科、³神戸市総合療育センター

【目的】

脊髄性筋萎縮症 (SMA) I 型の成人患者 2 名に対しインタビューを実施し、日々の生活の様子を聞き取った。計量的テキスト分析ソフトを用いてその内容を分析し、SMA I 型の患者の自分自身の生活への思いを明らかにしようと試みた。

【方法】

SMA I 型の女性患者 2 名 (A 32 歳、B 19 歳) に対して、半構成的インタビューを実施し、IC レコーダーに録音した。逐語録を作成し、計量的テキスト分析ソフトを用いて以下の手順で解析した。1. インタビュー内容を分析ソフトに読み込み、使用されている頻出語を抽出。2. 頻出語間の関連に関して、「頻出語・共起ネットワーク」を用いて分析。3. インタビュー中の頻出 100 語をコードとし、カテゴリーを抽出。4. 抽出されたカテゴリーがインタビューの中で語られた割合を分析。

【結果】

(1) A 氏では、抽出された 6 つのカテゴリー (①呼吸・人工呼吸器②コミュニケーション③家族・スタッフ④ライフスタイル⑤修学旅行の思い出⑥病気・障害) の中で、自らの生を支える人工呼吸器の大切さと家族や介護スタッフとの交流に関する言葉を最も多く認めた。一方、「障害・病気」に関する言葉は最も少なかった。(2) B 氏では、抽出された 7 つのカテゴリー (①養護学校高等部の思い出②自分と家族③大学で学ぶ④絵を描く⑤電動車椅子の体験⑥卒業後の就職⑦病気と障害) の中で、「大学で学ぶ」と「養護学校高等部の思い出」に関する言葉が頻回に語られ、「病気と障害」に関する言葉は 2 番目に少なかった。

【考察】

SMA I 型の年齢の異なる女性患者 2 名から現在の思いを聞き取った。両者ともに家族や周囲の人々との日常生活を肯定的に語り、思春期の思い出や将来の希望を語っていた。医療者は、ともすれば、治療の効果や生命予後を中心に疾病を捉えがちである。しかし、物心の付く前より人工呼吸器を使用してきた人々がどのように思春期を送り、自分自身の未来を築こうとしているかを知ることも重要である。在宅医療体制の整備や治療薬の開発により、生まれた時より一生を通じた治療やケアを必要とする人々が増えると予想される。その人々が、いかに自己形成期を過ごし、自分の生き方、病気や障害を評価しているかを考える必要がある。

【結論】

今回の SMA I 型の患者 2 名は、共に前向きに自分自身の生を捉え、未来に向かおうとしていた。今後、より多くの人々の思いを聞くことが必要である。